

老いと死の人間形成論的考察

山邊 光宏
(安田女子大学)

【要旨】

今後の人間形成論は、人間と教育とをライフサイクルの全体から把握すべきであり、「老いと死」の問題に積極的にアプローチする必要がある。

本稿では、「老いと死の人間形成」について老人自身の自己教育、あるいはその生涯学習という視点に限定して論究したい。しかも、主として理想的可能性としての「老いと死の人間形成」に関して、シュプランガー (Eduard Spranger, 1882-1963) における「良心論」を手がかりにして考察したいと考える。何ぜならば、「良心」こそ、人間形成論の全体を貫くキーワードに他ならないと思われるからである。

I 研究の目的と方法

本稿では「老いと死の人間形成」について「老人自身の自己教育」、あるいは「自身の生涯学習」という視点に立って論究することにする。すなわち、この不断の学びのなかでは、「老い」と「死の近づき」とが、いかに人間形成的役割を果たすことができるかを明らかにすることを目的とする。

その際、「老い」と「死の近づき」との消極的な面や影の面よりも、むしろ積極的な面や「光の面」を中心にして、すなわち理想主義的哲学の立場に立って、主として「理想的可能性」としての「老い」と「死の近づき」とに際しての人間形成について考察したいと考える。なるほど実際には老いと死は消極的で影の面を多く持つてはいるが、それらを転じていかにして消極的なものから積極的なものを生み出すことができるのか、ということ を明らかにしていくことにする。だから、本稿では、内的・精神的にもはや成長、あるいは成熟し続けていない人たちのことではなくて、主として不断に自己を形成し続けている人たちの場合を論じてみたい。つまり、生涯修養し続け、不断の生涯学習に努める老人の場合を問題にするのである。

老いと死の問題に関する研究には、学際的なものが求められ、かつ実証的・客観的方法も不可欠ではあるが、一つ哲学や思想もまた必要であろう。このように考えて、本稿では、文献研究による哲学的・思想的なアプローチを試みたい。

II 老いと死の今日的課題

これからの教育学、あるいは人間形成論には、一つ「老いと死」の問題をも導入すべきであろう。そのようにしてこそ、それらはより全体的な生涯教育学や生涯学習論となりう

るのである。岡田渥美によれば、「照準をもつば若い世代においてきた従来の教育学は、『老いと死』を主題的に扱うことはなかったのである。こうした事態は、明らかに従来の教育理論の内容上の欠如を示しているが、しかし・・・それは単なる内容上の問題には止まらず、むしろ教育理論として本質的な欠陥を示すものである。というのも、『老いと死』が見落されてきたということは、例えば人生における減衰、引退、喪失、死、有限性、別離など、・・・人間存在にとって必然的で本質的な諸局面を、十分に組み込むだけの理論枠を有していなかったことを端的に示しているからである。1)」。

今後の生涯教育学と生涯学習論とは、そうした従来の教育学の不十分なところを補完しなくてはならない。つまり、人間の生を、出生から死に至るまでのライフサイクル全体から把握することが大切なのである。だから、これからの教育学は、単に「子どもの発達」だけではなく、いわゆる「揺り籠から墓場までの発達」を問題にしなければならない。

しかしながら、一般的に「発達」という言葉は、無限の直線的な上昇と発展と拡大、また一面的な西洋近代精神をイメージさせるといえよう。だから、それは青年期、あるいはせいぜい壮年期までについては、適切な概念であるとしても、老年期や死が迫っている時期の人たちについては、一部適切ではあるが、必ずしも十分に適切な概念であるとはいえない。青年期以降、少なくとも壮年期以降はしだいに発達よりも、むしろ「成熟」という概念がより適切であり、前者の割合が減り、その分後者の割合が増えるのが望ましいのではなかろうか。人生の折返し地点を過ぎて当分の間はもちろん、老いて死を目前にしての発達でさえも一部可能でもあるし、また大切に価値あることでもあるが、逆に、老いて子どもに帰り、人間の原点に戻り、成熟と円熟の境地で安らかに死を迎えることもさらに大切ではなかろうか。人生や教育にとって、直線的な上昇も必要ではあるが、逆に折返しや円環運動、あるいは回帰説も忘れられてはならない。

岡田は、老年期に見合った「縮減の哲学」(philosophy of reduction)の構築を提唱して、次のようにいっている。すなわち、「ここにいう“reduction”(縮小、削減、減力)とは、いうまでもなく、歴史的には産業化社会に、そしてまた人生に関しては青年期や壮年期に最もふさわしい“production”(生産、製造、産出)の対概念である。したがって、近・現代を通じて支配的であった“プロダクション”中心の世界観・人生観に対して、・・・それとは全く異質で別次元の価値の地平を示唆しようとして、敢えて“リダクション”という言葉を用いてみた2)」と。ここで、上述のphilosophy of reductionは、われわれの文脈では「ユーターンの哲学」「折返しの哲学」「企業拡張しない哲学」「量ではなく質の哲学」「前進ではなく磨きをかける哲学」「発達ではなく成熟の哲学」等々と適宜に意識することができる。しかも、これらは、確かに「教育哲学」と「生涯学習の哲学」でもあるといっている。「生涯学習の哲学」一般においては、productionとreductionとの調和が求められるが、そのなかでも「老いと死の人間形成論」としてのその哲学においてはreductionにいつそう力点が置かれてもよからう。これからの生涯学習論は、老人や瀕死者の立場、及び死の問題をも考慮して、reductionの哲学をも導入しなくてはならない。

ところで、デーケン(Alfons Deeken)は、「教育の改革が急務となった現在、とくに『死への準備教育』は、生涯教育として幼児から高齢者まで、人生の各段階に応じて行う必要がある3)」といっている。また、「『死への準備教育』が生涯教育である以上、あらゆる年

代に向けて、それぞれに適切な方法を模索する必要がある⁴⁾ともいっている。そうだとすれば、「死への準備教育」は、明確に生涯教育・学習として行われるべきものである。時間的には、揺り籠から墓場まで、場所的には家庭・学校・社会のいずれにおいても、また無意図的・非形式的教育と意図的・形式的教育とのいずれによっても、あるいは他者教育・形成と自己教育・形成とのいずれによっても、行われるべきものである。

学校での死への準備教育も大切であり、ドイツ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スウェーデンなどでは、実際にそれが行われている。子どもにその教育を実施するためには、教師もあらかじめその教育を受けており、死について生涯学習を続けなくてはならないであろう。さらに、視野を拡大してみるならば、これはしばしば患者の死に出会う医師や看護婦についても、いえることではなかろうか。また、高齢者施設や家庭で、老いて死が近づいている人たちを介護している人々についても、いえることではなかろうか。このように、生涯学習としての死への準備教育の範囲は著しく拡大し、その主体と対象はきわめて多様であるといえよう。しかし、本稿では問題を限定して、「老いと死の人間形成論」を老人自身の自己教育・形成、あるいはその生涯学習という視点に立って論究したい。

さて、デーケン⁵⁾は、death educationを「死への準備教育」と訳しており、しかもこの日本語を自己自身のキーワードとして頻繁に用いているが、彼によれば「『死への準備教育』(デス・エデュケーション)はそのまま、自分の死までの毎日を、よりよく生きるための『生への準備教育』(ライフ・エデュケーション)となる⁵⁾」のである。だから、「死への準備教育」がその内容となっている、彼の著書名も『生と死の教育』なのである。他の人たちによっても、death educationは「生と死の教育」と訳されたり、また死に関わる教育のことが最初からこの日本語で表現されることもある。さらに、浄土真宗の立場では、その英語は「いのちの教育」を意味する、という説もある⁶⁾。

これらに関連して、「死生学」(thanatology (英), Thanatologie (独) = Sterbensforschung (独), 辞書的には「死学」「死亡研究」などの訳語。最近では「死生学」と訳す人も多い)と呼ばれる学問は、生と死とを表裏一体のものとして捉え、生を死に関わりのあるテーマから学際的に探究するのである。それは哲学、医学、心理学、民俗学、文化人類学、宗教学などのあらゆる分野から、生との関わりにおける死の問題に、あるいは死との関わりにおける生の問題にアプローチする。本稿は、哲学を中心とした死生学の探究であるといっていいい。これは、いわば「哲学的死生学」であり、しかも、教育学的な考察でもあるから、結局本稿は「教育哲学的死生学」、あるいは「生涯学習の哲学的死生学」であるといっていよかろう。ちなみに、デーケンによれば、「死生学の実践段階が、『死への準備教育』である⁷⁾」。これは、死までの時間をどう生きるかを考え学ぶ教育である。

いずれにせよ、確かに生と死は密接不可分で一体のものである、と見るべきであろう。人間とは、生まれたその瞬間から、すでに死につつつある存在である。死は生命の第一幕から始まっているのだ。だから、死をタブー視して、考えまいとすれば、これは生きることへの意識を希薄にしてしまうであろう。逆に、死を考えるならば、真剣に生を考えることになるであろう。同様に、死への教育は生への教育へとつながるであろう。

先に述べたように、生涯学習としての死への準備教育の範囲は著しく広いし、その主体と対象もきわめて多様ではあるが、しかし本稿では「老いと死の人間形成」について「老人自身の自己教育」、あるいは「自身の生涯学習」という視点に立って論究することにす

る。すなわち、老人の不断の学びのなかでは、「老い」と「死の近づき」とが、いかに人間形成的な働きをすることができるかを見ていきたい。しかも、これをシュプラングーにおける「良心論」を手がかりにして考察したいと考える。何ぜならば、われわれは上述の諸課題に対してきわめて有意義な思想的基盤を彼から導出し、学び取ることができ、かつ「良心」こそ、人間形成論の全体を貫く鍵概念に他ならないと思われるからである。

Ⅲ 老いの回想の人間形成的意義

老年期の人たちは、それ以前のいかなる年齢期にもまして「回想」のなかに生きているが、その同じ老人たちが「記憶」が悪くなるばかりであると嘆いているのは、不思議なことであろう。前者の方がいっそう内面、魂の深奥、良心に根ざしているのではなかろうか。シュプラングーによれば、「回想に際して問題なのは自己の生の構成要素であり、従って……生の連関に意義規定的に組み込まれている事実である⁸⁾」。単なる記憶は、心の深部とつながっていないので、良心とも無縁である。それに対して「回想のなかで記憶に残っているものは、すでにErinnerungという語が表明しているように、われわれの人格の内面(das Innere)の一部となっている⁹⁾」のである。その際、回想が個人的倫理に関わるものであったとしたら、それは内奥の個人的良心と結びつくであろう。

回想といっても、例えば過ぎ去りし青春の日々の回想のように、明るい回想もあるが、これは魂の根底を揺り動かし、良心を覚醒させるほどのものではなかろう。本稿では、人間形成にとってもっと積極的意義を有すると思われる回想についてのみ考えてみたい。それには、大別して、以下の二種類がある。

まず、第一にそれは「無常の痛み」を伴い、そこから「永遠の予感」を生み出すような、一種の「宗教的回想」とでもいうべきものである。それは苦悩や良心の呵責を伴い、これが「光」へとつながるような回想であるといっている。シュプラングーによれば、「思い出の痛みは、かつて体験された痛みに関わるだけではない。邪道であったがために、人はかつての勝利を泣くことがありうる¹⁰⁾」のである。すなわち、かつての痛みを痛みとして回想するだけではなくて、かつては勝利であり成功と喜びであったと思っていたことをも、老いの回想のなかでそれが目的のためには手段を選ばない邪道であったと深く悔いあらためることになり、「良心の呵責」が生まれるというのである。この「良心の呵責」の底から、もう一度力強く立ち上がって光と老成を目指さなくてはならない。良心による徹底した悪の自覚こそが、人間を善へと生まれかわらせうるであろう。これができたら、「一切の価値の転換」が行われ、「一切が本質的になる」のである。そうして、たとえいかに素朴な生活であっても、老人はみずからの生活のなかでの回想を通して、哲学者にも、またシュプラングーのあの「現世的敬虔」(Weltfrommigkeit)の人にもなることができるであろう。たとえいかに素朴であっても一種の「悟りの境地」に達し、良心の満足と安らぎとを体験することができる。回想を通して、boses Gewissen(やましい良心、消極的・否定的良心、悪いとする良心)からgutes Gewissen(やましくない良心、積極的・肯定的良心、善いとする良心)が生み出されたことになる。こうして、老人は謙虚になり、優しく強く豊かになれるのであろう。自己の生涯の存在理由について納得でき、自己の人生には意味があったと確信して、「良心の満足」と共に死を受容し迎えることができるであろう。

次に、必ずしも明るい回想でもないし、だからといって必ずしも悲痛な回想でもない、別の回想について考えてみよう。精力的に働く壮年期の意義は、自我を世界の一部に刻印することである。偉人の場合はもちろん、名もなき人たちの場合も素朴な形で、その足跡は世界に残るであろう。こうした自我の作品を、ゲーテは「人生の足跡」と呼んだ。シュプランガーによれば、老人の課題は「彼がみずからの自我を再び世界から取り戻さなくてはならないということであり、回想のなかでいったい自分とは本来何であるのかという問題に取り組むということであろう。こうしたより深い自己への回帰のなかでその時に、確かに何かあるものが時間から救出されたのだ、ということが示されるであろう¹¹⁾」。「生き方の根本軸」の転換によって、より深くより高い自己の中核としての良心のなかで、あるいは永遠性・超時間的なもの、あるいは宗教的・形而上的なものが予感されるであろう。なるほど、働き盛りの年齢期に「自我（主観）の客観化」を精力的に行い、「人生の足跡」を残すことは、必要でもあり、望ましいことでもある。しかし、そのままではまだ、不十分である。逆に、老年期にはその人生の足跡としての客観的作品と仕事とを根底から反省することによって、それを再び主観へと連れ戻し主観化しなくてはならない。すなわち、老年期には、回想を通しての「客観の主観化」が求められる。シュプランガーの宗教論と良心論との関連でいえば、「主観化」とは、むしろ「内面化」を意味する。これによって、良心のなかで宗教的・形而上的なものが予感されるであろう。

一例をあげて考えてみよう。いったいなぜプラトンは老年期に彼の生涯の主要テーマである「国家」をもう一度取り扱ったのであろうか。これに対して、シュプランガーはいつている。すなわち、「むしろ、プラトンがその間にさらに学んだ（知識をふやし知的に学んだという意味、筆者注）からではなく、老齢であることから異なった見方をしなくてはならなかったからである。確かに、より円熟したのであり、より精力的になったのではない¹²⁾」と。青年期や壮年期には精力的に客観的知識をふやし正確で壮大な理論構築をすることができるというその時期の固有性があるが、老年期にはそれまでに行ってきた仕事を回想し、老いの英知を発揮して磨きをかけ円熟したものにすることができるというこの時期ならではの固有性がある。老年期には、老年期でないとできないことを胸をはって堂々と言うべきではなからうか。しかも、こうしたことは、プラトンの場合に限られず、いずれの分野のいずれの仕事についてもいえることであろう。従って、一般に老年期の人々に求められることは、これまでの長い人生と仕事とを良心的に回想し、かつphilosophy of reductionを実践することなのである。

さてしかし、そうした一切の回想も、やがては死と同時にすべて消滅してしまうのだろうか。これについて、シュプランガーは次のようにいつている。すなわち、「そうであると考える者は、自己回想の本来の神秘について、おそらくまだ十分に深く考えたことがないのである。彼は自己の内なる宗教的なものをまだ感じたことがないのである。もちろん、それはきわめて深いところにある¹³⁾」と。つまり、魂の深奥・良心のなかにあるといえよう。回想は老人を魂の根底、つまり良心において永遠なものと結びつけ、老人に「宗教心」を呼び起こすと考えていると思われる。人間の本質の核心としての良心が、無に対して抵抗する。人間の最内奥の魂、あるいは良心は、不滅なものを求めずにはおれないようにつくられているのではなからうか。

とはいえ一方、現世に生きている人間は、死を免れえないことも確かな事実である。だから、シュプランガーはいつている。すなわち「他ならぬ人間は、この無常とあの永遠の持続との中間に立つようにつくられている。回想に幸あれ！それは時の単なる流れと経過に架橋するものだから¹⁴⁾」と。これは、全く良心についてもいえることである。回想を通しての良心こそ、現世と来世、時と永遠との間を媒介するといっている。

IV 生と死とを媒介する良心

シュプランガーは「老年期には少しずつ此岸と彼岸との間に立つことを学ばなくてはならない¹⁵⁾」といっている。これは、すなわち、「生と死との間に立つこと」の学習を意味している。その際、両者をそれぞれ結びつけ、媒介するものは、個々人の内奥における良心に他ならない。

老年期にはかつての激しい労働、競争と闘争との生活から解放されて、ゆとりと静寂のなかで彼岸や精神界への思いが深まる可能性が増してくる。ついには、あふれんばかりの神秘的なものが、現世的・現実的な制約を超えて湧き出てくるであろう。つまり、一切が「本質的」になり、一切が無限の彼方からきて、いわば別の世界の息吹を連れてくるであろう。ゲーテは「老年期にはわれわれは神秘主義者になる¹⁶⁾」といっている。ここで神秘主義者とは、必ずしも特定の宗教的信仰に生き、特定の神を信仰しているのではなくて、むしろゲーテやシュプランガーのあの「現世的敬虔」につながる生き方をする人を意味する。今日、定説として一般的にあげられている神秘主義の主要な特徴は、「普遍性」(Allgemeinheit)に他ならない。

老年期の神秘主義を、シュプランガーは次のように比喩的に表現している。すなわち、「海と山と野の上に柔らかな澄みきった雲の層が横たわっている、あのよく晴れた晩秋の日々を人は知っている。そのように、老人は人生の晩秋のなかで世界を見る。前景は本質的なものではない。この雲の層が一切を包み込み、すべての輪郭を柔らかにする¹⁷⁾」と。ここで「前景」とは、その前に出てくる「海と山と野」を指し、地上界としての「此岸」を意味する。それに対して「雲の層」とは、天上界としての「彼岸」を意味する。そうして、現世的敬虔と結びついた神秘主義においては、地上界と天上界、此岸と彼岸とは互いにつながり合って全体としての精神界を形成していると見ていい。

ところで、人間は老いて再び「単純さ」へと回帰するものであるが、これがいわゆる「かれた」境地であり、清澄さであろう。これも一種のreductionといえよう。そうしてそこにも、宗教的・神秘主義的要素が含まれている、と見ることができる。ちなみに、ここで「単純さ」は、シュプランガーのあの「心の純粋性」につながるといえよう。彼は良心の声が聴き取れるようになるためには心の純粋性が不可欠であることをくり返し強調しているが、これは確かに「老いの心の単純さ」をも含むと見ていい。ゲーテも、「純粋な心のなかにのみ、すべての救いが宿る」といっている。これは人間の一生涯にわたっての学習課題ではあるが、特に老齢になればなるほど、ますます求められるべきものであろう。たとえ途中ではいろいろ不純なことがあったにせよ、やはり「老いと死の近づき」という最後の段階の生き方こそが、最も大切なものではなかろうか。

以上で明らかなように、確かに「老人は一種の神秘主義者になる」。しかし、も

し地上的な現実を完全に払い除けうると考えるとしたら、それこそ思い違いであろう。現実との対決は、死の間際まで続く。先にも述べたように、神秘主義は地上界ともつながり合っている。やはり、現世と来世、此岸と彼岸との間に立つことを学ぶべきである。その際、両者をそれぞれ結びつけ媒介するものは、シュプランガーにあっては個々人の内奥における良心に他ならない。上述の「心の純粋性」と一体になったものとしての良心のなかでこそ、時と永遠、此岸と彼岸とが出会い生と死とが合一するといえよう。老人は、他のいかなる年齢期の者にもまして、回想のなかで良心を通して地上的存在としての有限な自己を永遠の世界につなげることができる。また、自己の生から死を、逆に自己の死から生を見ることができるであろう。そのための準備はすでに早い時期からなされるべきではあるが、老年期こそ最適期である。彼岸への道は、良心が目覚めており精神的に力強く生き続ける限りにおいて、すでにこの此岸で開けるといえよう。

このようにしてこそ、老人は心安らかに「死」を受容することができるであろう。死に対する心の準備と死の近づきとが、良心をさらに覚醒させ、人間を純粹かつ高貴にする。最高の生と最大限の人間性・倫理的成熟とを達成させてくれるであろう。死を目前にし、苦しみを耐え忍び、初めて人は深い世界が見えてくるのであろう。孤独に苦しみながら、初めて人は人生の深みに気づかされる。老い、病い、死の近づきなどの絶対的苦悩、極限状況、つまり悲劇的体験の極致において、物事が見えてくる。また、苦悩と死の近づきとの体験によってこそ、他者からの愛と思いやりに感謝し、他者への愛と思いやりを取り戻し、こうして平安な光のなかで死を受容することができるようになる。

シュプランガーもいっているように、「死そのものが何であるかは、全くわれわれの知識の及ばないところである」。しかし、「死の恐怖と死に方は、まだ生の側に属する¹⁸⁾」。だから、よい死に方のためにも、最後の最後までよい生き方を求め続ける他ないのではなかろうか。ヌーランド (Sherwin B. Nuland) によれば、「死に方は、すなわち生き方である。いかに誠実に品位をもって生きたかによって、死に方が決まるのだ¹⁹⁾」。「誠実に」とは、すなわち「良心的に」という意味であろう。だから、現世と来世との架橋としての良心を目覚めさせ続けることこそが、大切なのではなかろうか。

V 結果の考察と今後の課題

以上、「老い」と「死の近づき」との「光の面」を中心に考察してきた。けれども、逆の面もあることを知っていなくてはならない。実際、現実には、むしろあまりにも日常的なレベルでの、またあまりにも一般的な老人たちの「影の面」が問題にされることがほとんどであろう。しかし、だからこそ、光の面を求めて不断の生涯学習に努めるべきである、ということが明らかになったのではないと思われる。影の面についての客観的な実態調査等は、残された課題である。あるいは、痴呆やアルツハイマー病の老人たちも、単に医療や介護の問題としてだけでなく、生涯学習の思想としての人間形成論の範疇に含めて考察されるべきであろう。これも今後

の課題であろう。

本稿は、一貫して学習者自身による人間形成について論じたが、これによって老年期の人間形成の場合もやはりまず学習者主体自身の人間らしい生き方こそが大切であることが明らかになった。今後はさらに、老年期の学習者を取り巻く人たちの学習援助、及び学習環境づくりの問題へと研究を発展させていく必要があると考えている。

次に、death educationの考察を試みたが、その理論と実践は、まさにこれから求められ、広められていこうとしているものであるとすれば、本稿でこの視座を導入した意義はあると考える。

最後に、老年期における人間形成論には、少なくとも、時と所を超えた、また特定の信仰に拘束されない「現世的敬虔」としての「宗教性」や素朴な「宗教心」の概念が求められるであろう。本稿を通して、これこそが、「良心」に他ならない、ということが明らかにされたと思われる。

引用・参考文献

- 1) 岡田渥美編『老いと死－人間形成論的考察』玉川大学出版部、1994年、2頁。
- 2) 同書、375頁。
- 3) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波書店、2001年、106頁。
- 4) 同書、70頁。
- 5) 同書、4頁。
- 6) 岡田渥美編、前掲書、222－223頁参照。
- 7) デーケン、前掲書、3頁。
- 8) Eduard Spranger, Menschenleben und Menschheitsfragen, Gesammelte Rundfunkreden. R. Piper & Co. Verlag, München, 1963. S. 140－141
- 9) Spranger, a. a. O., S. 141.
- 10) Spranger, a. a. O., S. 146.
- 11) Spranger, Zur Psychologie der Bildsamkeit des Erwachsenen, 1953. in: Gesammelte Schriften, Bd. IV, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1974. S. 354.
- 12) Spranger, Das Wesen der Lebensalter mit besonderer Berücksichtigung der späten Lebensalter, 1941. in: GS, Bd. IV. S. 342.
- 13) Spranger, Menschenleben und Menschheitsfragen, S. 147.
- 14) Spranger, a. a. O., S. 147.
- 15) Spranger, a. a. O., S. 159.
- 16) Spranger, a. a. O., S. 161.
- 17) Spranger, Das Wesen der Lebensalter mit besonderer Berücksichtigung der späten Lebensalter, in: GS, Bd. IV. S. 343－344.
- 18) Spranger, a. a. O., S. 345.
- 19) シャーウイン・B・ヌーランド、鈴木主税訳『人間らしい死にかた』河出書房新社、1995年、361頁。